

# 1 哺 乳 類



## 1 哺乳類

近年の酷暑や記録的な豪雨などに象徴される「極端な気候変動」は、特に沢筋や河川敷に生息するカヤネズミ、カワネズミにとって大きな脅威である。

また近年、ことに昆虫類への影響が大きく取り沙汰されているネオニコチノイド系殺虫剤の影響は、特に昆虫食性の種に対し大きな影響力を持つと考えられる。地中生活をすることによってなかなか姿を見ることができないジネズミやヒミズ、県内に生息するすべてのコウモリにとって直接的な脅威であり、目に見えにくい形で影響が出始めている可能性は否めない。また、果実類の少ない夏季に、アリやハチなどの社会性昆虫に依存するニホンツキノワグマにとっても死活問題であり、頻繁に里や耕作地に出没することに繋がり得る。ひいては、本来の生息地である奥山に生息するニホンツキノワグマを、里グマ化する引き金にもなる可能性を内在した問題である。欧米諸国ではすでに使用禁止など、大幅な規制が行われている各種殺虫剤の使用に関し、慎重さが求められるところである。また、近年急速に被害の広がるナラ枯れ問題も、秋に堅果を多食して冬眠に備えるニホンツキノワグマや、樹洞を形成する大径木に依存して生息する森林性コウモリ類にとって深刻である。

さらに、比較的良好な自然環境が維持されている西中国山地では、島根県との県境沿いの稜線に大規模な風力発電所が建設されつつある。県内にも国内最大規模の風力発電所の建設計画が持ち上がっている。これらは、その場所のみならず、周辺域への直接的・間接的な環境への影響が危惧される。例えば、伐開による乾燥化で、土砂の流出や、建設地となった尾根筋に関係する各谷筋への継続的な小規模崩落などに起因する水環境の悪化を招くと考えられる。また、二次的には、植生にも大きく影響を与えることであろう。里山環境のような二次林を中心とした環境に生息する生物種だけならいざ知らず、極相林をその生活基盤とする生物にとっては致命的である。これが、建設時のみならず、運用中も継続的に続くことが予想されるため、将来的な影響は計り知れない。また、CO<sub>2</sub>排出削減の叫ばれる現在、「再生可能エネルギー」の運用の機運がより活発化し、さらなる計画が持ち上がってくると考えられ、自然破壊の直接的な原因とならないよう、慎重な対応が望まれる。

レッドデータブックひろしま 2011 の絶滅 3 種、絶滅危惧 I 類 6 種、絶滅危惧 II 類 5 種、準絶滅危惧 8 種から、今回、絶滅危惧 I 類が 7 種に増えたが、これは絶滅としていた種の生息が確認されたことによるものである。さらに新たに確認された詳細が不明な種を情報不足として追加した。

県内における絶滅哺乳類に関し、ニホンオオカミは、国内での絶滅が確実である。また、広義のニホンカワウソは、対馬において生息個体が確認されたものの、現段階において広島県に再分布する可能性は考え難く、ニホンオオカミと共に広島県内では絶滅とした。

一方、ニホンリスは隣県の県境近くでの確認情報から調査した結果、県東部・北東部を中心に複数箇所での生息が確認されたため、脆弱ながら再分布したと判断し、絶滅から絶滅危惧 I 類にカテゴリ変更を行なった。

カワネズミは、これまで絶滅危惧 II 類としてきたが、各地で河川改修が進むとともに、一次支流での情報が無くなり、一部河川の森林内を流れる最上流部のみに生息が確認できる状況である。これらは、生息河川である支流間での個体交流が困難になってきていることを示唆している。また、わずかに残る生息地では中国山地の稜線部に多く計画される風力発電所の建設にともなう、山林開発の影響が大きく危惧されるため、絶滅危惧 I 類に変更した。

県内のヤマコウモリに関しては、夏季に備北地域のブナ林での記録しかなかったが、新たに複数箇所を確認した。しかし近年、西日本での生息情報はごく僅かである。また、クロホオヒゲコウモリとシナ

ノホオヒゲコウモリは西中国山地の一部でしか確認ができず、共に絶滅危惧Ⅰ類に保留とした。

ツキノワグマは県北部から中南部での目撃が相次ぎ、分布範囲が拡大していることは明らかで、特に近年は、沿岸域も含めより顕著となっている。また、民家近くへの出没も多く、害獣駆除の対象になることも少なくない。西中国山地の山地奥部には比較的安定した個体群が存在し、増加傾向にあるものの、近年になって拡大した生息地においては、本来あるべき森林生態系の一部としての個体群が安定しているとは考え難い。また、中国山地の稜線部、特に西中国山地に多く計画される大規模風力発電所の建設にともない、良好な生息地が減少することが予測される。このことから、里に下りてくる個体が増加し、害獣駆除の対象となる可能性を勘案し、絶滅危惧Ⅰ類のまま保留とした。

瀬戸内海は、スナメリにとって重要な生息域であり、広島湾西部においては目撃情報が増加傾向にある。しかし、県内の主要な生息地であった芸予諸島での海底環境の改善が認められず、引き続き絶滅危惧Ⅰ類とした。

カヤネズミはアシ原や牧草地の減少とともに確認状況が著しく乏しくなり、生息地の分断化が進行していると考えられる。さらに、近年の記録的豪雨の連続によって河川敷に生息していた個体群の多くが確認できなくなったため、準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類にカテゴリーを変更した。

オヒキコウモリは広島市中心街周辺では多くの個体の存在が確認され、中区・南区・安佐北区に複数のねぐらの存在を確認した。1999年に学校校舎から見つかった国内最大級のねぐらは校舎の建て替えによって2001年に失われたものの、当初から他の繁殖場所やねぐらの存在が示唆されており、大きな障害となつてはいないと考えられる。また、2019年には市街地のみならず、西中国山地のブナ林上空でも生息を確認した。このため、絶滅危惧Ⅱ類のまま保留とした。

モリアブラコウモリは生息地が安定し、多くのブナ林で確認されたことから絶滅危惧Ⅰ類から絶滅危惧Ⅱ類に変更した。同様にテングコウモリは洞窟内で散発的に確認されるのみであるが、生息環境には大きな変化が認められず絶滅危惧Ⅱ類のまま保留とした。

亜種ヒワミズラモグラは基亜種ミズラモグラと区別が事実上不可能であり、ミズラモグラとして扱った。山域においては個体数も従来考えられていたほど少なくないことが確認されており、絶滅危惧Ⅱ類のまま保留とした。

ヒナコウモリは、冬季に沿岸部で3個体と、夏季には県北部のブナ林からさらに多くの個体が確認され、広く生息していることを確認し、絶滅危惧Ⅱ類から準絶滅危惧に変更した。

アズマモグラ、モモジロコウモリ、ユビナガコウモリ、ニホンコテングコウモリに関しては生息地、休息洞などに大きな変化は認められず個体群に短期的な影響はないと判断した。また、ニホンモモンガ、ヤマネに関しても生息地が西中国山地に限定されるものの生息環境は安定し個体群に影響はないと判断した。ニホンイタチも都市部からはチョウセンイタチとの軋轢や環境の悪化で減少していると考えられるが、山際から山間部の水際には良好な生息環境が維持されており、それぞれ準絶滅危惧のまま保留とした。

県内において、これまでノレンコウモリの生息情報は皆無であったが、2020年秋に西中国山地からの生息情報がもたらされた。哺乳類部会として直接の確認は未実施であり、情報もこの1例のみであることから、生息状況が把握できず、情報不足とした。今後、詳細な生息調査を必要とする。

(畑瀬 淳)

## 哺乳類選定種

### 絶滅 (EX)

- 1 ニホンオオカミ
- 2 ニホンカワウソ

### 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 1 ニホンツキノワグマ
- 2 カワネズミ
- 3 クロホオヒゲコウモリ
- 4 シナノホオヒゲコウモリ
- 5 ヤマコウモリ
- 6 ニホンリス
- 7 スナメリ

### 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 1 ミズラモグラ
- 2 モリアブラコウモリ
- 3 テングコウモリ
- 4 オヒキコウモリ
- 5 カヤネズミ

### 準絶滅危惧 (NT)

- 1 アズマモグラ
- 2 ヒナコウモリ
- 3 モモジロコウモリ
- 4 ユビナガコウモリ
- 5 ニホンコテングコウモリ
- 6 ニホンイタチ
- 7 ニホンモモンガ
- 8 ヤマネ

### 情報不足 (DD)

- 1 ノレンコウモリ

## ニホンオオカミ 絶滅(EX) EX-①, EX-②, EX-③

*Canis lupus hodophilax* Temminck, 1839

食肉目 イヌ科

環境省: EX

広島県 2011: EX

広島県 2003: EX

概要	本州・四国・九州に分布していた。頭胴長 120～129 cm, 尾長 27～40 cm。耳は小さく、頭骨高が低く、頭部の丸みが少ない。頭骨標本を比較する際には、イヌに比べて額から吻部にかけての窪みが小さく、裂肉歯が大きい。また、最大の特徴として、口蓋骨後端正中部が前方に湾入していることがあげられる。極相林から二次林まで適応範囲は広がったと考えられるが、中型以上の哺乳類を対象に、追跡型のハンティングを行なったと推測できるため、下層低木の少ない安定した環境を、より好んでいた可能性がある。1905年、奈良県鷲家口で捕獲された個体を最後に確認されていない。
生息・生育状況	山県郡安芸太田町香郷（旧加計町）に、同所で捕獲されたと伝えられるニホンオオカミの頭骨が現存する。このことは、同所にニホンオオカミが生息していたことの客観的証拠にはならないが、古文書や環境からみて生息していたことは十分考えられる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	—
特記事項	山県郡安芸太田町（旧筒賀村）にニホンオオカミのものとされる、吻端ならびに下顎が欠損した、半ミイラ状の頭骨が存在するが、真偽のほどは定かでない。
産地情報	なし

広島哺乳類談話会 2000. 広島県の哺乳類. 169 pp. 中国新聞社, 広島.

阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎吾・米田政明 2008. 日本の哺乳類 (改訂2版). 206 pp. 東海大学出版会, 秦野.

(畑瀬 淳)

## ニホンカワウソ 絶滅(EX) EX-①, EX-②, EX-③

*Lutra nippon* Imaizumi & Yoshiyuki, 1989

食肉目 イタチ科

環境省: EX

広島県 2011: EX

広島県 2003: EX

概要	頭胴長 60～80 cm あまり, 尾長約 40～55 cm, 体重 5～10 kg 程度。背面は褐色ないし灰褐色, 腹面は白色。頭部は扁平で長大な尾を持つ。四肢に水かきを持ち, 泳ぎが巧みで, 魚類や甲殻類を捕獲し, 陸に上がって食べる。単独性で, 広い縄張りを持つ。かつては全国の河川・沿岸域に生息していた。1983年以來生息確認がなされおらず, 環境省は 2012 年に絶滅種に指定した。2018 年, 対馬で朝鮮半島由来と考えられるカワウソが発見され, 在来個体群と考えるべきとの意見がある。
生息・生育状況	広島県内では, 産地情報をともなった標本は存在していないが, 多くの伝承などから, かつて生息していたことは確実である。しかし, 1950 年頃を境に目撃情報もなくなり, 1950 年代のうちにはほぼ絶滅したものと考えられる。いつ頃まで生息していたか詳細は明らかでない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	毛皮採取のための狩猟圧や河川の生物相の貧弱化, コンクリート護岸を中心とした河川改修。沿岸域に遺存していた個体群も海岸線の護岸整備によって姿を消した。生息が確認された場合, 餌となる水棲動物が豊富な環境であることのみならず, 行動範囲内には体についた塩分を洗い流すため, 必ずきれいな陸水が流れていること, また, 体毛についた水をぬぐい取ることができるヌタ場を備えることが必須である。
特記事項	近年の研究で, 四国と, 国内他所にいた個体群は, 大陸の個体群からの分岐時期が大きく異なり, 北海道個体群とともに, 遺伝的に大きな差が確認されている。これは, 国内に複数種のカワウソが存在していた可能性を示唆するとともに, ニホンカワウソ自体が特定の種を指していない可能性を内在している。2020 年, 高知県の海岸線を生息域とする確認情報があり, 対馬の個体群と合わせ, 国内からは絶滅していないとする説がある。
産地情報	なし

広島哺乳類談話会 2000. 広島県の哺乳類. 169 pp. 中国新聞社, 広島.

阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎吾・米田政明 2008. 日本の哺乳類 (改訂2版). 206 pp. 東海大学出版会, 秦野.

(畑瀬 淳)

**ニホンツキノワグマ** 絶滅危惧 I 類(CR+EN) VU-②, VU-③ (種々の状況を加味してランクを上げた)

*Ursus thibetanus japonicus* Schlegel, 1857  
 食肉目 クマ科

環境省: LP  
 広島県 2011: CR+EN  
 広島県 2003: CR+EN

概要	頭胴長 1.3 m 前後, 体重は雄が 50~80 kg, 雌が 30~60 kg。体色はほぼ全身が真黒, もしくは黒褐色で黒味が強く, 多くは胸に三日月状の白斑がある。冬眠から覚める春は, 植物の萌芽や液果類, 夏はシロアリやアリ, ハチなどの社会性昆虫, 秋はドングリなどの堅果をおもに食べるとされる。人里近くに居つき, 家畜用飼料や残飯を常食としている個体は, 体重 100 kg を超えることもある。本州・四国・九州に分布する。しかし, 九州の個体群は絶滅の可能性が高く, 四国の個体群も個体数が極わずかである。中国地方でも個体数の減少が懸念されている。ニホンツキノワグマは, 東アジア一帯に生息するツキノワグマの亜種にあたる。
生息・生育状況	最近では, いわゆるブナ林やミズナラ林を中心とする森林地帯を離れ, 人家周辺に出没する個体が多く目撃されている。こうした個体群の分散傾向は, 一見分布域の拡大化および個体群増加を示しているかのようであるが, 実際は生息密度の希薄化と人間社会との軋轢をもたらしており, 個体群維持にとって好ましい現象ではない。環境省の RDB では, 東・西中国山地の個体群を孤立個体群としているが, 近年では生息範囲が重なる傾向がある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	もっとも大きな要因は, 大規模風力発電所の建設などによる森林の開発である。安定して生活できる森林を大規模開発から守るとともに, ヒトの生活圏との境界に干渉帯を設置する必要がある。
特記事項	西中国山地のニホンツキノワグマ個体群は本州西端に孤立しており, 他の個体群と遺伝的な差異が認められている。このことはニホンツキノワグマの進化を知る上で学術上たいへん貴重な存在である。県指定野生生物種。
産地情報	広島市 (西区, 安佐南区, 安佐北区, 佐伯区), 三原市 (大和, 本郷, 久井), 三次市 (三次, 甲奴, 君田, 布野, 作木, 吉舎, 三良坂, 三和), 庄原市 (庄原, 西城, 東城, 口和, 高野, 比和), 大竹市, 東広島市 (福富, 豊栄), 廿日市市 (廿日市, 佐伯, 吉和), 安芸高田市 (吉田, 八千代, 美土里, 高宮, 甲田, 向原), 安芸太田町 (加計, 筒賀, 戸河内), 北広島町 (芸北, 大朝, 千代田, 豊平)

広島哺乳類談話会 2000. 広島県の哺乳類. 169 pp. 中国新聞社, 広島.

阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎吾・米田政明 2008. 日本の哺乳類 (改訂 2 版). 206 pp. 東海大学出版会, 秦野.

(畑瀬 淳)

**カワネズミ** 絶滅危惧 I 類(CR+EN) VU-①, VU-② (種々の状況を加味してランクを上げた)

*Chimarrocale platycephalus* (Temminck, 1842)  
 トガリネズミ形目 トガリネズミ科

環境省: なし  
 広島県 2011: VU  
 広島県 2003: VU

概要	頭胴長約 120 mm, 尾長約 100 mm, 体重約 50 g の水生のトガリネズミの仲間。日本固有種で, 本州・九州の最上流部溪流に生息する。水中で, 水生昆虫をはじめ, サワガニなどの甲殻類や小型の魚類を捕獲し, 陸に上がって採餌する。溪流沿いに広い範囲の縄張りを形成し, 往復を繰り返しながら採餌するため, 同じ川筋には多くの個体が生息することはできない。1960 年代までは, 県内の溪流に普通にみられたが, 生息環境と考えられる河川でも姿を見ることは少ない。
生息・生育状況	県内では, 一級河川最上流の溪流部を中心に確認されているが, 生息に必要な自然護岸の溪流が減少しており, 生息地は限定的である。また, これらの理由から生息地間を移動することが困難になっており, 各個体群が遺伝的に分断・孤立している可能性があり危惧される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	溪流の上部での土地改変工事などで, 濁り水が続くと餌料生物の死滅とともに生息できなくなる。とくに, 県内で計画されている内陸部での風力発電所は, 建設時の溪流への土砂の流入のみならず, 稜線部の伐開をとまうため, 溪流の水質悪化と餌料生物資源の薄弱化を逃れることは難しく, 本種にとっては致命的である。
特記事項	—
産地情報	広島市 (安佐南区, 安佐北区, 佐伯区), 三次市 (三良坂), 庄原市 (西城, 東城, 高野, 比和), 廿日市市 (佐伯, 吉和), 安芸太田町 (加計, 戸河内), 北広島町 (芸北, 大朝)

広島哺乳類談話会 2000. 広島県の哺乳類. 169 pp. 中国新聞社, 広島.

阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎吾・米田政明 2008. 日本の哺乳類 (改訂 2 版). 206 pp. 東海大学出版会, 秦野.

(畑瀬 淳)

**クロホオヒゲコウモリ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-①, CR+EN-②**

*Myotis pruinosus* Yoshiyuki, 1971

翼手目 ヒナコウモリ科

環境省: VU

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: DD

概要	前腕長 30~34 mm, 頭胴長 38~44 mm, 体重 4~7 g。体毛は黒っぽく、銀色の差毛がある。 本州、四国、九州の広葉樹林に生息する日本固有種。大径木の樹洞内で冬眠や休息をする樹洞性コウモリ。夜間、森林内を飛翔しながら昆虫を捕らえて餌とする。 県内でクロホオヒゲコウモリが確認されているのは吉和冠山と十方山だけである。本種は吉和冠山と十方山に、近縁のシナノホオヒゲコウモリ <i>M. ikonnikovi hosonoi</i> Imaizumi, 1954 は臥龍山に分布しており、両種の棲み分けは生態学上、興味深い。
生息・生育状況	まとまった面積の広葉樹の大径木からなる溪畔林に生息しており、大径木の樹洞をねぐらにしている。これまでのところ、県内では吉和冠山と十方山の 2 か所しか生息地が知られていない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生息地である溪畔林を通過する林道の拡幅による生息環境の改変。温暖化による台風の大規模化や集中豪雨による生息地環境の劣化。 山間部に計画されている大型風力発電機への衝突死が懸念される。
特記事項	—
産地情報	廿日市市 (吉和)

上野吉雄・畑瀬 淳・小柴正記・河津 功・日比野政彦・向山 満・薄木奈津子・吉行瑞子 2002. 西中国山地のコウモリ相 I. 高原の自然史, 7: 85-97.

上野吉雄 2012. クロホオヒゲコウモリ. 広島県の絶滅のおそれのある野生生物 (第3版) — レッドデータブックひろしま 2011 —, p. 52. 広島県.

(上野吉雄)

**シナノホオヒゲコウモリ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-①, CR+EN-②**

*Myotis hosonoi* Imaizumi, 1954

翼手目 ヒナコウモリ科

環境省: LP

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: DD

概要	前腕長 33~36 mm, 頭胴長 42~51 mm, 体重 4~7 g。体毛は黒褐色で、金色の差毛がある。 本州のブナ林に生息する日本固有亜種。大径木の樹洞内で冬眠や休息をする樹洞性コウモリ。夜間、森林内を飛翔しながら昆虫を捕らえて餌とする。県内でシナノホオヒゲコウモリが確認されているのは臥龍山だけであり、本種の国内における分布の西限域として貴重な生息地である。
生息・生育状況	ブナの大径木からなるまとまった面積の森林に生息しており、大径木の樹洞をねぐらにしている。これまでのところ、県内では臥龍山の 1 か所しか生息地が知られていない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生息地であるブナ林の温暖化による大型台風や集中豪雨の増加による衰退。 山間部に計画されている大型風力発電機への衝突死が懸念される。
特記事項	本亜種はこれまでフジホオヒゲコウモリ <i>M. ikonnikovi fujiensis</i> Imaizumi, 1954 とされていたが、環境省レッドデータブック (2014) ではシナノホオヒゲコウモリ <i>M. ikonnikovi hosonoi</i> Imaizumi, 1954 として扱われているのでそれに従った。
産地情報	北広島町 (芸北)

上野吉雄・畑瀬 淳・小柴正記・河津 功・日比野政彦・向山 満・薄木奈津子・吉行瑞子 2002. 西中国山地のコウモリ相 I. 高原の自然史, 7: 85-97.

上野吉雄 2012. フジホオヒゲコウモリ. 広島県の絶滅のおそれのある野生生物 (第3版) — レッドデータブックひろしま 2011 —, p. 52. 広島県.

(上野吉雄)



**ヤマコウモリ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-①, CR+EN-②**

*Nyctalus aviator* Thomas, 1911

翼手目 ヒナコウモリ科

環境省: VU

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: なし

概要	前腕長 57~66 mm, 体重 35~60 g の国内最大の食虫性コウモリ。北海道から本州北部を中心に生息し、夜間森林の樹冠上を飛翔しながら、飛行性昆虫を採餌する。探索音として、18 kHz 前後のヒトの可聴域に含まれる低い音声を使用する。樹洞を休眠、冬眠場所として使用することが知られ、大径木のある安定した森林が生息には欠かせない。狭長型の翼を持ち、高速で長距離を飛行できることから、季節移動の可能性も示唆される。県内では、2010 年に事実上の初生息確認がなされた。
生息・生育状況	比婆山の標高 1000 m 辺りのブナ林では、7 月下旬から 9 月上旬にかけて雄を中心とした個体群が観察されている。それ以外の場所では、音声記録を中心とした散発的な記録があるのみで、安定した生息地は確認できていない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	ブナ林が夏季における重要な生息基盤となっていることは事実であり、ブナ林や周辺のミズナラ林の保全が欠かせない。また、内陸部への風力発電所の建設は、ブナ林の伐採とともに、個体に対する直接的なバットストライクの危険性を内在しており、注意を要する。
特記事項	—
産地情報	呉市 (呉), 庄原市 (西城), 廿日市市 (吉和), 安芸高田市 (八千代), 北広島町 (芸北)

上野吉雄・畑瀬 淳・石井秀雄・日比野政彦・渡辺健三・渡辺貴美恵・松本明子・井原 庸・加藤淳司・畑中翔太・鎌田夏未・高橋真央・松村澄子 2013. 広島県比婆山のコウモリ相. 高原の自然史, 15: 75-80.

畑瀬 淳・上野吉雄 2020. 広島・島根県境に位置する鷹ノ巣山のコウモリ相. 高原の自然史, 20: 1-5.

(畑瀬 淳)

**ニホンリス 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-①**

*Sciurus lis* Temminck, 1844

齧歯目 リス科

環境省: LP

広島県 2011: EX

広島県 2003: EX

概要	頭胴長 16~22 cm, 尾長 14~17 cm。夏毛では背面が赤褐色で腹面が白色。四肢と体側には赤味の強い部分がある。冬毛では背面が灰褐色。 主として本州中部以北に生息し、中国地方・四国・紀伊半島などに局地的に分布する日本固有種。中国地方では数が少ない。おもに低山帯のマツ林に生息し、マツ類やオニグルミなどの種子を中心に、昆虫類や節足動物などの小動物を餌とする。
生息・生育状況	2018 年に福山市で本種の生息が目視確認され、2020 年に同所で写真撮影されたことによって、その生息が確実なものとなった。その後、神石高原町豊松や庄原市西城町でも生息の情報が得られた。近年、鳥取県日南町・岡山県新見市・島根県邑南町などで本種が確認されるようになり、県内にはこれらの地域から拡大分散してきた可能性がある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	本種の生息地では、まとまった面積のアカマツ林の伐採を避けるなどの保全措置が必要である。
特記事項	—
産地情報	福山市 (福山), 庄原市 (西城), 世羅町, 神石高原町 (豊松)

畑瀬 淳 2012. ニホンリス. 広島県の絶滅のおそれのある野生生物 (第 3 版) — レッドデータブックひろしま 2011 —, p. 51. 広島県.

(上野吉雄)

**スナメリ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-①, CR+EN-②**

*Neophocaena phocaenoides* (Cuvier, 1829)

鯨偶蹄目 ネズミイルカ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: なし

概要	全長 1.5~1.7 m, 体重 50~70 kg。全身が灰白色, 多くの小型クジラに見られるような三角形の背鰭はなく, 高さ 2~3 cm の隆起が長く続く。頭部は丸く, 吻部も短くほとんど目立たない。水深が 40~50 m 以浅の海域に生息し, とくに 20 m 以浅の海域での目撃例が多いとされる。砂底に生息するイカナゴやイワシなどの小型魚類, 頭足類などを餌としている。日本近海にはいくつかの系群が知られ, 瀬戸内海産もその一つである。
生息・生育状況	1970 年頃までは島嶼部への航路沿いや, 竹原市沖の天然記念物指定海域などで頻りに観察されたが, 1980 年代から急速に減少, まれになった。わずかに竹原市忠海の沿岸域などでは比較的安定的に確認されている。最近では宮島近海, 広島湾奥部での観察例が増えてはいる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	継続的に行なわれてきた海砂採取や, ダムによる河川由来の砂の減少によって, 餌料生物の生息地が破壊された。同時に水深が増し, 生息に適さなくなっている。また, 船舶塗料由来などの化学物質の生物濃縮による影響や, 海中に浮遊する多量のプラスチックごみなどの影響が考えられる。さらに, 比較的音に頼って採餌するなど, 音環境に敏感とされる本種にとっては往来する船舶も多く, 生息環境が維持されているとはいいがたい。
特記事項	河川から補充されていた砂がダムでせき止められていること, 「たたら製鉄」に関連した砂の流入がなくなり海底砂が補充されないことによって, 餌料生物と, 生息に適した水深の回復が望めない。とくに, 海砂採取が盛んであった地域には大きな河川がないため, より顕著である。さらに, 船舶の往来が多く, 音環境の悪化が著しい。
産地情報	広島市 (南区, 佐伯区), 呉市 (倉橋, 下蒲刈, 蒲刈, 安浦), 竹原市, 廿日市市 (廿日市, 大野, 宮島), 江田島市 (能美, 沖美), 大崎上島町 (大崎)

広島哺乳類談話会 2000. 広島県の哺乳類. 169 pp. 中国新聞社, 広島.

小宮輝之 2002. フィールドベスト図鑑 日本の哺乳類. 256 pp. 学習研究社, 東京.

(畑瀬 淳)

**ミズラモグラ 絶滅危惧 II 類(VU) VU-①, VU-②**

*Euroscaptor mizura* (Günther, 1880)

トガリネズミ形目 モグラ科

環境省: NT

広島県 2011: VU

広島県 2003: CR+EN

概要	頭胴長 80~106 mm, 尾長 20~26 mm, 体重 26~35 g。体毛は黒色で, 尾が比較的長い。本州に局地的に生息する小型のモグラで日本固有種。土壌中にトンネルを掘り, その中を移動しながらミミズ類や昆虫類などを餌とする。北広島町臥龍山ならびに廿日市市吉和のミズラモグラは本州の西限域の個体群として貴重である。
生息・生育状況	備北山地と西中国山地で生息が確認されているが, 県内では 4 か所しか生息地が知られていない。北広島町臥龍山は国内における本種の分布西限にあたり, 貴重な生息地である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	餌となる土壌昆虫やミミズの豊富な広葉樹林に生息しており, 本種の生息地では, 広葉樹林の皆伐を避けるなどの保全措置が必要である。また, 内陸部への風力発電所の建設は, 低周波音とともに地面に直接的な振動をもたらし, 振動を嫌う本種への壊滅的な影響を与える可能性が高く, 未知の生息地を含め注意を要する。
特記事項	広島県レッドデータブック (2012) では, ヒワミズラモグラ <i>E. mizura hiwaensis</i> (Imaizumi, 1955) として扱われている。ここでは, 環境省レッドデータブック (2014) にしたがってミズラモグラで評価した。
産地情報	庄原市 (西城, 東城, 比和), 廿日市市 (吉和), 北広島町 (芸北)

上野吉雄・足利和英・保井 浩・桑原一司 1996. 広島県芸北町の哺乳類. 高原の自然史, 1: 399.

上野吉雄・佐久間智子・白川勝信・小宮啓吾 2009. 広島県臥龍山におけるミズラモグラ *Euroscaptor mizura* 生息地の植生. 高原の自然史, 14: 77-81.

(上野吉雄)

モリアブラコウモリ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-①, VU-②

*Pipistrellus endoi* Imaizumi, 1959

翼手目 ヒナコウモリ科

環境省: VU

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	前腕長 32～34 mm, 頭胴長 43～53 mm, 体重 5～9 g。体毛は赤褐色。 本州、四国のブナ林に生息する日本固有種。大径木の樹洞内で冬眠や休息をする樹洞性コウモリ。夜間、森林内を飛翔しながら昆虫類を捕らえて餌とする。県内でモリアブラコウモリが確認されているのは5か所である。
生息・生育状況	まとまった面積のブナの大径木からなる森林に生息している。これまでのところ、県内でモリアブラコウモリが確認されているのは臥龍山・比婆山・吉和冠山・北広島町鷹ノ巣山・湯来冠山の5か所である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生息地であるブナ林の温暖化や台風、集中豪雨などによる衰退。 山間部に計画されている大型風力発電機への衝突死が懸念される。
特記事項	近似種であるアブラコウモリ <i>Pipistrellus abramus</i> Temminck, 1840 は平野部に、本種はブナ林に棲み分けており、生態学上興味深い。
産地情報	広島市 (佐伯区), 庄原市 (西城), 廿日市市 (吉和), 北広島町 (芸北)

上野吉雄・畑瀬 淳・小柴正記・河津 功・日比野政彦・向山 満・薄木奈津子・吉行瑞子 2002. 西中国山地のコウモリ相 I. 高原の自然史, 7: 85-97.

上野吉雄・畑瀬 淳・石井秀雄・日比野政彦・渡辺健三・渡辺貴美恵・松本明子・井原 庸・加藤淳司・畑中翔太・鎌田夏未・高橋真央・松村澄子 2013. 広島県比婆山のコウモリ相. 高原の自然史, 15: 75-80.

(上野吉雄)

テングコウモリ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-①, VU-②

*Murina hilgendorfi* Milne-Edwards, 1872

哺乳綱翼手目 ヒナコウモリ科

環境省: なし

広島県 2011: VU

広島県 2003: VU

概要	前腕長 41～46 mm, 頭胴長 59～73 mm, 体重 9～15 g。体毛は灰褐色で、銀色の差毛がある。 全国の森林に生息する日本固有種。大径木の樹洞内で冬眠や休息をする樹洞性コウモリであるが、洞窟内でも見られる。夜間、森林内を飛翔しながら昆虫類を捕らえて餌とする。県内では廃坑や鍾乳洞などで見られるが、個体数は多くない。
生息・生育状況	県内では鍾乳洞や廃坑、トンネルなどで見られ、これまでのところ、9か所で生息が確認されている。 臥龍山ではホオノキの葉の裏で、三段峡では林道のトンネルの天井で休息している個体が確認されている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	冬眠や休息に利用している洞窟の入り口が土砂などで塞がれると、洞窟への出入りが困難となる。 山間部に計画されている大型風力発電機への衝突死が懸念される。
特記事項	—
産地情報	広島市 (安佐北区, 佐伯区), 庄原市 (西城, 東城, 比和), 廿日市市 (大野), 安芸太田町 (加計, 戸河内), 北広島町 (芸北), 世羅町 (甲山)

上野吉雄・畑瀬 淳・石井秀雄・日比野政彦・渡辺健三・渡辺貴美恵・松本明子・井原 庸・加藤淳司・畑中翔太・鎌田夏未・高橋真央・松村澄子 2013. 広島県比婆山のコウモリ相. 高原の自然史, 15: 75-80.

上野吉雄・保井 浩・小柴正記・藤原俊二・若本啓二・足利和英・桑原一司 2014. 北広島町の哺乳類. 北広島町の自然, p. 682-683. 北広島町教育委員会, 北広島.

(上野吉雄)

**オヒキコウモリ** 絶滅危惧Ⅱ類(VU) NT-a, NT-b (種々の状況を加味してランクを上げた)

*Tadarida insignis* (Blyth, 1861)  
翼手目 オヒキコウモリ科

環境省: VU  
広島県 2011: VU  
広島県 2003: CR+EN

概要	前腕長 60 mm 前後, 体重 35 g 前後。尾が腿間膜から大きく突出していることが和名の由来。翼は狭長型で, 高速で長距離を移動し, 「渡り」の可能性が示唆されている。国内では大陸からの迷行個体として古くから散発的に知られたが, 1996 年, 宮崎県の小離島から初めて複数個体の生息が報告された。その後, 現在までに高知県・若狭湾・紀伊半島・伊豆半島から生息が報告されているが, いずれも, リアス式海岸に面した小離島, もしくは断崖である。広島県からは例外的に, 内陸の人工建造物内に生息していることが報告されている。探索音に国産食虫性コウモリとしてはもっとも低い 13 kHz 辺を使うため, 直接声を聴くことができる。
生息・生育状況	国内最大級の繁殖コロニーであった修道学園 (広島市中区) の校舎新築にともない, その生息場所が失われたが, 一部は新校舎を利用している。また, 修道学園旧校舎にいた個体群には, その行動範囲内に別のねぐらを持つことが確認されている。近年, 南区宇品周辺の複数の建築物, 安佐北区三入東の学校校舎にて新たなねぐらが確認された。また 2019 年, 北広島町のブナ林において, 音声を確認した。
存在を脅かす要因・保全の留意点	ねぐらとして使用が知られていない鉄筋コンクリート製建築物の改修, 取り壊し。ねぐらとして使用が確認されている建築物の改修時は, 6~9 月の繁殖期 (前後を含む) を避けること。また, 風力発電所の建設は, 採餌場のひとつであるブナ林の伐採とともに, 個体に対する直接的なバットストライクの危険性を内在しており, 注意を要する。
特記事項	近年, 佐賀県の鉄筋コンクリート製建築物, 熊本県の新幹線高架などからの生息が報告されている。
産地情報	広島市 (中区, 東区, 南区, 安佐南区, 安佐北区, 安芸区), 呉市 (呉), 東広島市 (西条), 廿日市市 (廿日市, 大野), 安芸高田市 (八千代), 北広島町 (芸北)

広島哺乳類談話会 2000. 広島県の哺乳類. 169 pp. 中国新聞社, 広島.

畑瀬 淳・上野吉雄 2020. 広島・島根県境に位置する鷹ノ巣山のコウモリ相. 高原の自然史, 20: 1-5.

(畑瀬 淳)

**カヤネズミ** 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-①, VU-②

*Micromys minutus* (Pallas, 1771)  
齧歯目 ネズミ科

環境省: なし  
広島県 2011: NT  
広島県 2003: なし

概要	頭胴長 50~80 mm, 尾長 60~80 mm, 体重 10g 前後の旧北区に広く分布する世界最小のネズミの仲間。背面は黄土色から暗褐色, 腹面は白色。ススキやアシなどのイネ科の草原に生息し, 河川敷や休耕田だけでなく, 水田などの耕作中の農地でも見られる場合もある。ただし, イネを採食することはほぼない。草を縦に細く裂き, 巧みに絡み合わせ, 横向きに出入り口がある, 直径 10cm ほどの特徴的な球状の巣を作り, 繁殖する。広島県での繁殖期は 4 月から 7 月と, 9 月から 11 月。2~8 仔を産む。細い草に登るときは, 尾を茎に巻きつけて体を安定させる。
生息・生育状況	県中北部の牧草地や茅場, 県南部では河川敷の草原などで普遍的に生息確認されていたが, 近年減少が著しい。とくに, ここ数年の記録的豪雨の後, 太田川河川敷ではほぼ確認できていない。また, 休耕田の開発などによる生息地の消失や分断も起きている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	河川改修によるアシ原の減少。牧草地に代表される草地の減少や分断化と非継続性。河川の氾濫によるアシ原やススキノ原の流失。
特記事項	—
産地情報	広島市 (東区, 安佐北区, 佐伯区), 福山市 (神辺), 三次市 (吉舎), 庄原市 (西城), 安芸高田市 (八千代), 安芸太田町 (加計), 北広島町 (芸北, 千代田, 豊平), 大崎上島町, 世羅町 (甲山)

広島哺乳類談話会 2000. 広島県の哺乳類. 169 pp. 中国新聞社, 広島.

阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎吾・米田政明 2008. 日本の哺乳類 (改訂 2 版). 206 pp. 東海大学出版会, 秦野.

(畑瀬 淳, 佐藤周平)

## アズマモグラ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b

*Mogera imaizumii* (Kuroda, 1957)

トガリネズミ形目 モグラ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: NT

概要	頭胴長 121～159 mm, 尾長 14～22 mm, 体重 48～127 g。体毛は暗褐色で、尾は短い。 主として本州中部以北に生息し、中国地方・四国・紀伊半島などに局地的に分布する日本固有種。土壌中にトンネルを掘り、その中を移動しながらミミズ類や昆虫類などを餌とする。中国地方に分布しているアズマモグラは大型のコウベモグラ <i>M. wogura</i> (Temminck, 1842) に駆逐されて山間部に生息し、体も小型である。
生息・生育状況	備北山地と西中国山地で生息が確認されているが、県内では9か所しか生息地が知られていない。北広島町臥龍山は国内における本種の分布西限にあたり、貴重な生息地である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	餌となるミミズ類や昆虫類の豊富な広葉樹林に生息しており、本種の生息地では、広葉樹林の皆伐を避けるなどの保全措置が必要である。
特記事項	—
産地情報	三次市 (三次), 庄原市 (西城, 東城, 高野, 比和), 廿日市市 (大野), 安芸太田町 (加計, 筒賀), 北広島町 (芸北)

上野吉雄・足利和英・保井 浩・桑原一司 1996. 広島県芸北町の哺乳類. 高原の自然史, 1: 399-400.

上野吉雄・保井 浩・小柴正記・藤原俊二・若本啓二・足利和英・桑原一司 2014. 北広島町の哺乳類. 北広島町の自然, p. 681-682. 北広島町教育委員会.

(上野吉雄)

## ヒナコウモリ 準絶滅危惧(NT) NT-a

*Vespertilio sinensis* (Peters, 1880)

翼手目 ヒナコウモリ科

環境省: なし

広島県 2011: VU

広島県 2003: DD

概要	前腕長 47～54 mm, 体重 14～30 g。全国の広葉樹林の生息する樹洞性コウモリ。夜間、おもに森林の樹冠上を飛翔し、飛行性昆虫を採餌する。探索音として、食虫性コウモリとしては比較的低い約 20kHz の高さの音声を発するため、直接可聴音として聞こえることがある。東北で繁殖する個体は、冬季には南に長距離の移動を行なうことが知られる。県内では、8月中下旬から9月にかけて、標高 1000 m 前後のブナ林で多くの個体が確認される。また、冬季に沿岸域で少数が確認されてはいるが、その他の時期にはどこにいるかは解明されていない。
生息・生育状況	夏季は、まとまった面積のある大径木のあるブナ林で、夜間に採餌のため飛行する個体が多く確認されているが、日中の休息場所などは特定されていない。捕獲調査によって、それぞれの生息地で雌も確認されており、県内での繁殖も示唆される。冬季には、宮島や広島市内の沿岸域で、休息中の個体が散発的に確認されているにすぎないが、周辺域に越冬地が存在する可能性もあり、今後の調査が待たれる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	繁殖場所や日中の休眠場所などはわからないものの、ブナ林上空が夏季における重要な採食場所となっていることは確実であり、ブナ林や周辺のミズナラ林の保全が欠かせない。また、内陸部への風力発電所の建設は、ブナ林の伐採とともに、個体に対する直接的なバットストライクの危険性を内在しており、注意を要する。
特記事項	—
産地情報	広島市 (佐伯区), 庄原市 (西城), 廿日市市 (吉和, 宮島)

畑瀬 淳・上野吉雄 2020. 広島・島根県境に位置する鷹ノ巣山のコウモリ相. 高原の自然史, 20: 1-5.

上野吉雄・畑瀬 淳・石井秀雄・日比野政彦・渡辺健三・渡辺貴美恵・松本明子・井原 庸・加藤淳司・畑中翔太・鎌田夏未・高橋真央・松村澄子 2013. 広島県比婆山のコウモリ相. 高原の自然史, 15: 75-80.

(畑瀬 淳)

**モモジロコウモリ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Myotis macrodactylus* (Temminck, 1840)

翼手目 ヒナコウモリ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: NT

概要	前腕長 34～41 mm, 体重 5.5～11 g。全国に生息する小型の洞窟性コウモリ。夜間、森林内や水面上を飛翔しながら飛行性昆虫を採餌する。
生息・生育状況	県内では、廃鉱の坑道や県東北部の鍾乳洞を中心に確認されているが、個体数は多くない。かつて多く存在した廃坑は、安全管理目的から多くはコンクリートで封鎖されたため、生息できる環境自体が少なくなっている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	日中の休眠や冬眠、出産子育ての場所として、廃坑道や鍾乳洞を利用するため、安全管理目的での廃坑道のコンクリートによる封鎖や、鍾乳洞への土砂の流れ込みによる閉塞は致命的となる。廃坑道は人止め柵による封鎖が望ましい。また、鍾乳洞への土砂の流入は定期的に取り除くことが望ましい。また、鍾乳洞の過度な利用は、生息の不安定要素となりうる。
特記事項	—
産地情報	広島市 (佐伯区), 庄原市 (東城, 比和), 廿日市市 (大野), 安芸太田町 (加計), 北広島町 (芸北)

広島哺乳類談話会 2000. 広島県の哺乳類. 169 pp. 中国新聞社, 広島.

阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎吾・米田政明 2008. 日本の哺乳類 (改訂2版). 206 pp. 東海大学出版会, 秦野.

(畑瀬 淳)

**ユビナガコウモリ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b**

*Miniopterus fuliginosus* (Hodgson, 1835)

翼手目 ヒナコウモリ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: NT

概要	中型のコウモリで、前腕長 47 mm 前後、体重 14 g 前後。比較的高速で飛行し、樹冠上で飛行性昆虫を採餌する。日中の休息や、繁殖、冬眠は洞窟内で行われる。翼を形成する指骨がきわめて長く、狭長型の翼を持つ。そのため、長距離の飛翔に適しており、数 100 km 規模での移動が確認されている。体毛は黒いピロード状。アジア大陸に広く分布し、日本は分布の東端にあたる。山陰地方の日本海に面した海食洞では、大規模な繁殖集団が知られる。また、使用されなくなった長いトンネルや、ダムの管理用坑道などを大集団で利用する例も知られる。
生息・生育状況	行動範囲の広い種で、県内でその生活史が完結しているわけではない。これまで県内での繁殖例は知られていないが、庄原市東城町の鬼の岩屋をはじめとする鍾乳洞、廿日市市大野町高見の大野鉱山跡の坑道、さらには沿岸部に点在する戦跡洞が越冬や移動途中の中継基地として利用されている。本種は集合性が高く、出産子育てなどの特定の目的で利用する洞窟が限定されている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	個体群維持は洞窟の存続に強く依存しており、不安定である。日中の休眠や冬眠のためにはかなり洞窟の存在と、採餌場となる自然林の存在が不可欠である。県東北部を除き、鍾乳洞がほとんど存在しないため、古い坑道や、戦跡などの閉鎖がもっとも大きな要因となる。また、内陸部への風力発電所の建設は、個体に対する直接的なバットストライクの危険性を内在しており、注意を要する。
特記事項	—
産地情報	広島市 (南区, 安佐北区, 佐伯区), 呉市 (呉), 庄原市 (東城, 比和), 廿日市市 (大野), 江田島市 (江田島), 安芸太田町 (加計, 戸河内), 神石高原町 (豊松)

広島哺乳類談話会 2000. 広島県の哺乳類. 169 pp. 中国新聞社, 広島.

畑瀬 淳・上野吉雄 2020. 広島・島根県境に位置する鷹ノ巣山のコウモリ相. 高原の自然史, 20: 1-5.

(畑瀬 淳)

## ニホンコテングコウモリ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b

*Murina silvatica* Yoshiyuki, 1983

翼手目 ヒナコウモリ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: VU

概要	前腕長 29～33 mm, 体重 5 g 前後。全国の森林に生息する小型のコウモリ。いわゆる樹洞性コウモリとして分類され、樹洞内から発見されることもあるが、クズの葉が漏斗状に枯れた内側などを利用し、休眠することも多い。林内の低層を飛行しながら昆虫を採食する。冬期に雪中で埋もれるように冬眠するようすが報告され、生態・生理学上たいへん興味深い。
生息・生育状況	比較的まとまった面積のある広葉樹林に生息し、全国的には普通種との認識が定着しつつあるが、県内では少数の生息地が知られるにすぎない。生息地の森林における高木層の樹種のみならず、林床の植生に大きく影響されているものと考えられる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生息地である広葉樹林の伐採や、自然災害による衰退。ニホンジカからの林床の食圧による植生の脆弱化。
特記事項	2003 年度版では、 <i>M. silvatica</i> Yoshiyuki, 1983 と表記したものの、2011 年度版では <i>M. ussuriensis silvatica</i> Yoshiyuki, 1983 と亜種表記に変更していた。今回、世界哺乳類標準和名目録に従い、独立種に変更。
産地情報	広島市 (安佐北区), 三次市 (三良坂), 庄原市 (西城, 東城, 比和), 廿日市市 (吉和), 安芸太田町 (戸河内), 北広島町 (芸北)

上野吉雄・畑瀬 淳・石井秀雄・日比野政彦・渡辺健三・渡辺貴美恵・松本明子・井原 庸・加藤淳司・畑中翔太・鎌田夏未・高橋真央・松村澄子 2013. 広島県比婆山のコウモリ相. 高原の自然史, 15: 75-80.

上野吉雄・畑瀬 淳・小柴正記・河津 功・日比野政彦・向山 満・薄木奈津子・吉行瑞子 2002. 西中国山地のコウモリ相. 高原の自然史, 7: 85-97.

(畑瀬 淳)

## ニホンイタチ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b

*Mustela itatsi* (Temminck, 1844)

食肉目 イタチ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: NT

概要	頭胴長 30 cm 前後 (雄), 20 cm 前後 (雌)。尾長 14 cm 前後 (雄), 8 cm 前後 (雌) で体サイズに明瞭な性的二型がある。夏毛は茶褐色がかかった山吹色からチョコレート色, 冬毛はくすんだ山吹色。相対的に胴が長く四肢が短く見える。また、尾率が 50 % を超えない。きれいな水辺に生息し、泳ぎも巧みで、カエルや魚などの水棲動物のほか、ムカデなどを好んで捕食する。近縁のチョウセンイタチは、明るい体色で黄色味が強く、体が大きい。
生息・生育状況	都市化の進む平野部中心地からは、ほとんど姿を消したのと考えられる。一方で、山際から山間部にかけての水辺では比較的良好な生息状態を保っている。生息に適した環境は、チョウセンイタチ <i>M. sibirica coreana</i> と完全に一致はしないものの、両種が生息可能な環境では、より体の大きなチョウセンイタチが優位であると考えられる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	河川改修によって、生息場所となる自然護岸が失われないよう、工法を検討すること。
特記事項	従来、本種とチョウセンイタチの交雑による遺伝子攪乱が憂慮されてきたが、同一の生息場所で入手した両種を含む轢死体、約 70 個体を精査したものの、その中間的な特徴を持つ個体は確認できなかった。ただし、染色体や DNA を用いた調査ではないため、交雑の可能性自体は否定できない。
産地情報	広島市 (東区, 西区, 安佐南区, 安佐北区, 安芸区, 佐伯区), 呉市 (呉, 安浦), 三原市 (本郷, 久井), 福山市 (福山), 三次市 (三次, 吉舎, 三良坂), 庄原市 (東城, 高野, 比和), 大竹市, 東広島市 (西条, 八本松, 黒瀬), 廿日市市 (大野), 安芸高田市 (吉田, 八千代, 美土里, 甲田), 熊野町, 安芸太田町 (加計, 筒賀, 戸河内), 北広島町 (芸北, 千代田, 豊平), 神石高原町 (油木, 三和)

広島哺乳類談話会 2000. 広島県の哺乳類. 169 pp. 中国新聞社, 広島.

阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎吾・米田政明 2008. 日本の哺乳類 (改訂 2 版). 206 pp. 東海大学出版会, 秦野.

(畑瀬 淳, 佐藤周平)

## ニホンモモンガ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b

*Pteromys momonga* Temminck, 1844

齧歯目 リス科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: NT

概要	頭胴長 140～200 mm, 尾長 100～140 mm。飛膜と扁平な尾を利用して滑空する夜行性のリスの仲間。ムササビよりずっと小型で、本州・四国・九州のスギ林やスギを含む混交林に生息する。餌料として、木の葉や芽・花・果実・樹皮などの植物を利用するが、スギの新芽や雄花にもっとも依存する。樹洞内に営巣し、巣材にもスギの樹皮を細かく裂いたものを用いる。
生息・生育状況	県内では 1993 年に初めて生息が確認された後、西中国山地全域の標高 100 m あまりのスギ植林地から、1,000 m を超えるブナ・スギ混交林にまでに生息することが確認された。しかし、営巣に適した自然樹洞が形成される大径木のない森林からは確認できていない。一方で、環境として良好と考えられる備北地域からはまったく報告がない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	かつては、スキー場の開発などによるブナ林の消失がもっとも脅威とされた。しかし、今後は風力発電所などの開発による、森林の大規模伐採や過度な道路開発などに注意が必要。
特記事項	—
産地情報	広島市 (安佐南区, 安佐北区, 佐伯区), 廿日市市 (吉和), 安芸太田町 (加計, 戸河内), 北広島町 (芸北)

広島哺乳類談話会 2000. 広島県の哺乳類. 169 pp. 中国新聞社, 広島.

阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎吾・米田政明 2008. 日本の哺乳類 (改訂 2 版). 206 pp. 東海大学出版会, 秦野.

(林 臨太郎)

## ヤマネ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b

*Glirulus japonicus* (Schinz, 1845)

齧歯目 ヤマネ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: NT

概要	頭胴長 80 mm 前後, 尾長 50 mm 前後, 尾にも長い被毛がある。背面の正中に黒い帯状の背中線がある。生息環境としては、成熟したブナ科の落葉性広葉樹の森を原則とし、さらに、枝伝いに移動することが可能な下層低木が発達していることが好ましい。また、餌となる昆虫が多く、地表にはコケ類が茂るほどの湿度が維持されている環境が最適と推測される。多くの齧歯類と異なり切歯は細く華奢で、外骨格の脆弱な昆虫を主食としている。また、セルロースを分解するための発酵槽としての盲腸を持たず、餌として利用できる植物は、おもに液果などに限られる。長期間冬眠することが知られ、民家内で発見されることも多い。
生息・生育状況	県内では、西中国山地のブナ科を中心とした成熟した森林からのみ、生息が確認されている。備北地域にも生息適地と考えられる森林が多く存在するが、まったく報告はない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	過度な道路開発や、大規模な森林伐採をとまなう山林開発による林床の乾燥化。
特記事項	国天然記念物 (地域を定めず)。
産地情報	広島市 (安佐南区, 安佐北区, 佐伯区), 廿日市市 (廿日市, 佐伯, 吉和), 安芸太田町 (加計, 筒賀, 戸河内), 北広島町 (芸北)

広島哺乳類談話会 2000. 広島県の哺乳類. 169 pp. 中国新聞社, 広島.

阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎吾・米田政明 2008. 日本の哺乳類 (改訂 2 版). 206 pp. 東海大学出版会, 秦野.

(林 臨太郎)



ノレンコウモリ 情報不足(DD) DD-a, DD-b

*Myotis bombinus* Thomas, 1906

翼手目 ヒナコウモリ科

環 境 省: VU

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概 要	前腕長 37～43 mm, 体重 5～10 g。背面は灰褐色で、腹面は白っぽい。比較的耳介が大きく、耳珠はより長く先端は尖り、目立つ。和名は、腿間膜の後縁に長い毛が列生することから、これを暖簾に見立てたもの。北海道・本州・四国・九州・口永良部島から記録されているが、確認地域は限定的。
生息・生育状況	岡山県などでは報告があるものの、これまで県内からの報告がなかった。広島市佐伯区湯来の鍾乳洞から発見されたとの未確認情報があるが、詳細は不明である。。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	日中の休眠や冬眠、出産子育ての場所として、廃坑道や鍾乳洞を利用するため、安全管理目的での廃坑道のコンクリートによる封鎖や、鍾乳洞への土砂の流れ込みによる閉塞は致命的となる。廃坑道は人止め柵による封鎖が望ましい。また、鍾乳洞への土砂の流入は定期的に取り除くことが望ましい。また、鍾乳洞の過度な利用は、生息の不安定要素となりうる。
特記事項	—
産地情報	広島市 (佐伯区)

広島哺乳類談話会 2000. 広島県の哺乳類. 169 pp. 中国新聞社, 広島.

阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎吾・米田政明 2008. 日本の哺乳類 (改訂 2 版). 206 pp. 東海大学出版会, 秦野.

(畑瀬 淳)

